

に有之寄仙洞詠之、さかの山は行平詠之、非山、只天皇御事を山といへり、わしの山は靈山也、ゆきのみ

山は雪山也、おほうち山在名所、寄大内也、普通寄禁中源氏云、大和物語、寛平御座大内山時、兼輔參て詠之、只

寄内裏歟、延喜御時、被申、彼位間事、於法皇御記曰、延長七年、英明朝臣申、參今御寺、昨日御大内山參入之時、當御湯殿之間、祇候奉仰、仍夜亥二剋云云、

しでの山冥土、又も、へ山なにくれとよめるは、只やまの重心也、

〔東遊記 後篇五〕名山論

余幼より山水を好み、他邦の人に逢へば必名山大川を問ふに、皆各其國々の山川を自贊して天下第一といふ、甚信じ難し、既に天下をめぐり、公心を以て是を論ずるに、山の高さもの富士を第一とす、又餘論なし、其次は加賀の白山なるべし、其次は越中の立山、其次日向の霧島山、肥前の雲仙嶽、信濃の駒が嶽、出羽の鳥海山、月山、奥州の岩城山、岩鷲山也、是に次で豊前の彦山、肥後の阿蘇山、同國久住山、豊後の姥が嶽、薩摩の海門嶽、伊豫の高峯、美濃の惠那嶽、御嶽、近江の伊吹山、越後の妙高山、信濃の戸隠山、甲斐の地藏嶽、常陸の筑波山、奥州の幸田山、御駒が嶽等也、其餘は碌々論ずるに不足、伯耆の大山、上野の妙義山は、余いまだ是をみず、其高低を知らず、出羽の羽黒山のごとき、其名甚高けれども、其山は甚低し、都の鞍馬山程には及びがかし、湯殿山も、叡山よりは低かるべくみゆ、是は佛神垂跡の地ゆゑに、參詣の者多きによりて、其名高き也、山の姿峨々として、嶮岨畫のごとくなるは、越中立山の劔峯に勝れるものなし、立山は登る事十八里、彼國の人は富士よりも高しと云、然れども越中に入りて、初て立山を望むに、甚高きを覺えず、數月見て漸々に高きを知る、是は連峯參差たるゆゑ也、最高く聳え、たがいに相争ふ程なる峯五ツあり、劔峯も其一也、其外にも峯々甚多く連り、波濤のごとく連り、皆立山なり、此ゆゑに、たとへば都の北山を望むのごとし、遠くより見るに、何れを鞍馬山とも、稱しがたきのごとし、是をみても、人多能なる者は、反